

一介の老翁になるまえに

福田立明

もつとも政治的でないと信じこんでいる者が、教師最後の挨拶文を在職中の政治背景から語りはじめなければならぬとは、なんと皮肉な話でしょう。そもそも初めになった60年代そのものが、そういう時代風土を成していたからでしょうか。アメリカを中心とする資本主義陣営とソ連邦中心の共産主義陣営との対立が、原水爆を武力背景にして極限状況に達するなか、政治イデオロギーの対立は「平和国家」日本にも、あらゆる所に亀裂を生じさせていました。明日があるかどうかさえわかったものではないという状況にあって、政治なんて冗談でしょうと、やけっぱちに、「オラハ死ンジマッタダァ」と歌いながら、往時のヒッピー、いまでいうニートとして日々を送ることも不自然ではない時代環境でした。

日本の大学というのはいつも進歩主義的知識人と呼ばれる人びとの共同体であり、そこでは伝統的に生真面目な教員と学生とが埋めようもない世代間ギャップに気づかずに、60年代も生真面目な対立と馴れ合いを繰り返していました。もちろんわずかですが、酒盛りをこよなく愛し、「帰ッテキタ酔ッパライ」さながらに世相を揶揄しながら講義を楽しむエピキュリアンの先任英文学教授もいて、大学とは面白いところだということもわかりました。それでもおぼろげな記憶では、私の教職キャリアは、棍棒を手に、覆面で顔を見えなくした過激派学生によって研究室から追い出されるという悪夢からはじまります。反米イデオロギーこそが進歩主義的知識人に共通な精神的支柱ですから、アメリカ文学にかかわる英語教師が当時の大学で、どんな立場に置かれ続けられねばならなかったか、想像がつくというものです。もちろん私にもあの国の嫌いな面はいっぱいありましたし、いまはもつと沢山あるのですが、それでも私たちにない素敵なところもある——そういう意味で

あの人たちほどには偏狭でなくていたいと思っていました。ひと口でいえば、個人の思考と行動においては、いつもリベラルでありたいということだけです。

教授会とか教職員組合の会合では、いつも議決権などほしくないほどの少数派。むしろ異世代の他者を自覚できるだけに、教室や課外活動、合宿など、学生といっしょにいるときに生き甲斐を味わうことを学んだのは、無自覚なうちにこれほどまで長く教育者として生きる結果になった者にとって、きつと幸運だったといえるでしょう。往時の文部省は学園紛争を沈静化するため教員と学生のキャンプや合宿を奨励していましたから、地方の国立大学では学部の枠を超えた集団で、寺院やキャンプ地での合宿にうんざりするほど参加させられました。当時の論争相手の学生が五十歳代になって企業や医療機関などで活躍するのを見るのは、嬉しさ半分、人間これほどまで変わるものなのか、という感慨も覚えさせてくれます。

二度目の滞米生活を在外研究員としてヴァージニアで送るあいだ、とくに小学生、幼稚園児だった子どもの異文化環境適応状況を全国紙の地方版に連載するのが契機になって、彼の地での多元文化尊重と、その裏になお残る他者差別の問題に関心を抱きつづけてきました。私のゼミに入った学生は、最初に他人の悪口をいうことを禁じられます。他者差別の初めの一步になるからです。80年代に注目を浴びはじめるマイノリティの代表格といえるアフリカ系女性作家トニ・モリソンやアリス・ウォーカーについて卒業論文を書く、とくに女子学生が増えたのは、ノーベル文学賞やピューリッツァ賞受賞作家というばかりでなく、彼女たちが教師の口のはしほしに問題意識を感じ取ってくれたことがあるのかもしれない。

アメリカ社会への愛憎感情を深めて帰国して間もなく、ゴルバチョフのグラスノスト、ペレストロイカにより共産圏で自由化の嵐が吹き荒れました。それが1989年11月、冷戦構造を支え続けた鉄のカーテンの象徴、ベルリンの壁が一夜にして民衆の手で崩壊させられる結末を見たとき、私は滞米時代以来の髭を剃りとして教

壇に立ちました。学生が嘩然としましたが、そういうことが自分の生存中に生起するとは思ってもいなかったのです。

勤務先大学の所在地は、岐阜、富山、新座と移り変わりました。長良川の清流が美濃谷から濃尾平野へと下る出口の岐阜の町は、工業化に伴う環境汚染の時代でも、素朴な小観光都市であり続けました。夕方になると鵜飼舟の囃子の音が聞こえ、家の近くの丘の上から観覧舟が幾艘も川上へと上っていくのが見えました。金華山を背景に花火が川面に映える晩、子どもを乗せたバギーを押す私に声をかけてくれるデート中の学生がいるような町でした。もしも交通事故で愛妻を喪うという悲運に遭った友人からの緊急の電話がなかったなら、一生ひとつの大学で職を全うすることになっていたことでしょう。

大学院設置申請中の富山大学では、哲・史・文中心の12コースからなる人文学部に在籍し、最初で最後の教授1・助教授1という伝統的な小講座制を経験しました。相手が英語学・英文学・アメリカ文学の専門分野を同じくする学生・院生になったことで、学生紛争期以来、個々の学生とはひとりのおとなの間人として対する、という習慣が余計に身に染みつきました。コースのオリエンテーション合宿などの校外指導も、こちらはすべて学生自身の企画と進行に乗るだけで、もちろん食費や交通費も自弁が当然でした。

そういうやり方が普通とは限らないことに気づかされるのは、女子大学に転じて2年ほども要しました。ゼミ合宿先でそこからほど遠からぬ地方都市を訪ねてから帰りたいという学生の要望をかなえることができないのです。合宿先から抜け出て、たまたま近くを旅していた私たちに平気で合流するような共学校の大学生の娘を見ていた手前、団体行動しか許されない22歳の女性たちには、つい憐れみを催させられたのを覚えています。近年はそういう企画を立てようとする学生さえもいなくなってしまう、そのせいでもあるのか、同じ教室で共に学ぶなかまの名前も覚えようとしないう学生さえ見かけます。学生仲間でのコミュニケーションの必要度

が低下しているのだとすれば、大学にとって嬉しくない傾向といえるでしょう。人間関係を創りあげる意欲をなくし、個の殻に閉じこもる幼児化した若者が人間存在の意味を考える文学的な学問体系に関心を持たなくなるのは自然のことかもしれません。

もしも若返ってもういちど教育者になれといわれたら、私は幼児教育を選ぶことですが、一度限りのこの世の教職歴を、英文学科最終学年生と共に終（修）了という形でまっとうできるのはまことの幸運です。今年のゼミ学生は学科最後の者という意識があったのか、二度までも彼女たちの「お食事会」に誘ってくれました。二年間演習を共にした数年前までの卒業生をも含め、かけがえないこの世でのめぐり合いの人たちです。

もともと教育者に生まれつくひとはありえないので、教育者のペルソナをはずして、ただの人間にかえることは、私にとっても人生最大のリベレーションに違いありません。ひとのお子さま方のお世話をこれだけ長期に務めさせてもらいましたので、しばらくはタイミングよく一族に加わりつつあるふたりの孫息子（生まれる前に性別がわかるとは、なんとという世になったものでしょう！）の遊び相手となり、あとは世間から許されるかぎり離れたところで一介の老翁として過ごすのが、わが人生最後の美学です。

福田立明 (ふくだたつあき)

生年月日

一九三四年五月一八日

現住所

埼玉県朝霞市宮戸三―三―八二

学歴

一九六六年三月 南山大学外国語学部英米科卒業

一九六〇年三月 東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程修了(文学修士)

一九六九年三月 東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程中途退学



職歴

一九六九年四月 岐阜大学助手教養部

一九七〇年四月 岐阜大学講師教養部

一九七二年四月 岐阜大学助教教養部

一九八一年四月 岐阜大学教授教養部

一九八三年四月 文部省在外研究員としてアメリカ合衆国へ出張

(二〇ヶ月)

一九八六年四月 富山大学教授人文学部

一九九五年四月 跡見学園女子大学教授文学部

この間、非常勤職歴としては、立教大学、金沢大学、金城学院大学、南山大学、富山大学大学院、岐阜大学等の講師を歴任。

業績

【単書】

『アメリカニズムと神話形成』(一九九六・六、開文社出版)

【共書】

『アメリカ文学読本』(一九八二・三、有斐閣)

『アメリカ文学史』(一九八八・四、英宝社)

【学術論文】

『フォークナー文学の土俗性と普遍性』(一)『文学について』第

一〇〇第八号(一九七二・九)一九八五・七、文学について同人会)

『ロレンス・ダレル『四部作』残響(上・中・下)』『現代文学』第

一〇〇一〇二号(一九七三・一二)一九七四・一二、現代文学

編集委員会

- 「ベッシー・スミスとアメリカ作家」『英語青年』第一二五巻 第一〇号（一九八〇・一）
- 「黒猫はどこからきたか（一）（二）」『岐阜大学教養部研究報告』第一八号（一九八二・一）一九八三・一、岐阜大学教養部
- 「Edgar A. Poeと死後の〈生〉」『富山大学人文学部紀要』第一二号（一九八七・三、富山大学人文学部）
- 「リップ・ヴァン・ウインクルもしくは建國神話の逆構築」『英語青年』第一三五巻 第九号（一九八九・一二）
- 「失われたアニマ、取り戻されたテキスト」『跡見学園女子大学紀要』第三二号（一九九八・三、跡見学園女子大学）
- 「ポウの地形的想像力」『跡見英文学』第一四号（二〇〇一・三）
- 「フォークナーの地勢図」『フォークナー協会誌』『フォークナー』第一四号（二〇〇二・四）

上掲のほかの学術論文、翻訳、書評などは省いた。